

# 論 文 要 旨

学位論文題目 思春期の注意欠如・多動傾向と情緒の問題との関連メカニズム

氏 名 齊藤 彩

本論文は、注意欠如・多動傾向と情緒の問題との関連についての先行研究を概観し、本研究の目的や構成を示した第1章から第3章、注意欠如・多動傾向と情緒の問題との関連における遺伝要因と環境要因の寄与の構造を確認した第4章、遺伝要因を統制した環境要因の影響下での注意欠如・多動傾向から情緒の問題への因果関係を検証した第5章、注意欠如・多動傾向が学校ライフイベントに関連し、さらに自尊感情を媒介して情緒の問題へと関連するメカニズムを検討した第6章、学校ライフイベントに加え、両親の養育態度の効果を検証した第7章、そして研究を総括した第8章から構成されている。

序論の第1章では、注意欠如・多動性障害（ADHD）の疫学や精神医学的症状の併存率の高さを示すとともに、医学的な診断のADHDに限らず、連続体としての「注意欠如・多動傾向」に着目し、情緒の問題との関連メカニズムを検討する必要性を論じた。また、思春期の発達段階に焦点を当てた研究の重要性について述べた。第2章では、注意欠如・多動傾向と情緒の問題との関連についての先行研究として、行動遺伝学的検討や心理社会的要因に着目した検討を概観した。さらに、先行研究における限界点を踏まえ、思春期の子どもの注意欠如・多動傾向と情緒の問題との関連について、遺伝要因と環境要因の寄与の構造の実証、遺伝要因を統制した環境要因の影響下での因果関係の実証、心理社会的要因の媒介メカニズムの実証という本論文で扱う課題を導出した。第3章では、本論文の目的と構成、各研究で使用したデータソースの概要について述べた。

本論は、行動遺伝学的検討を行った第I部（第4章、第5章）と、心理社会的要因の媒介メカニズムの検討を行った第II部（第6章、第7章）から構成されている。第4章の研究1では、小学校5年生から中学校2年生の787組の双生児データを用いた二変量遺伝分析を行った。その結果、注意欠如・多動傾向と情緒の問題との間では、遺伝相関、共有環境相関、非共有環境相関のすべてに有意な関連が認められ、思春期の子どもの注意欠如・多動傾向と情緒の問題との関連には、遺伝要因と環境要因が共に寄与していることが明らかとなった。第5章の研究2では、小学校5,6年生（Time 1）と中学校1,2年生（Time 2）の2時点における一卵性双生児（ $N=194$ ）の縦断データを用いた検討を行った。一卵性双生児ペアの差得点を使用した分析により、遺伝要因を統制した環境要因の影響下での注意欠如・多動傾向と情緒の問題との因果関係を検証した。その結果、Time 1の注意欠如・多動傾向からTime 2の情緒の問題への因果関係が確認され、その背景には個々人に特有の効果をもたらす非共有環境要因が寄与していることが示唆された。

第6章の研究3では、中学生826名と担任教員22名により得られたデータを用いて、注意欠如・多動傾向が学校ライフイベントに関連し、さらに自尊感情を媒介して情緒の問題へと関連するという仮説モ

デルについて検証した。その結果、注意欠如・多動傾向の高さが、学業および友人関係のポジティブな経験の少なさやネガティブな経験の多さに関連し、さらに自尊感情の低下を媒介して、情緒の問題の高さへと関連するメカニズムが示唆された。研究4では、小学校5年生 (Time 1)、小学校6年生 (Time 2)、中学校1年生 (Time 3) の3時点における子ども ( $N=202$ ) とその母親の縦断データを用いて、注意欠如・多動傾向 (Time 1) が学校ライフイベントに関連し (Time 1)、さらに自尊感情 (Time 2) を媒介して情緒の問題 (Time 3) へと関連する縦断的関連の仮説モデルについて検証した。その結果、注意欠如・多動傾向の高さが、学業や友人関係、教師との関係性や運動会・学芸会などにおけるポジティブな経験の少なさおよびネガティブな経験の多さに関連し、それらの経験が約1年後の自尊感情の低下を媒介して、さらに約1年後の情緒の問題の高さへと関連するメカニズムが示唆された。第7章の研究5では、小学校5年生の子ども ( $N=202$ ) とその両親のデータを用いて、研究3,4で実証された関連メカニズムについて、学校ライフイベントに加え、両親の養育態度の効果がみられるかどうかの検討を行った。その結果、注意欠如・多動傾向の高さは、学校でのポジティブな経験の少なさおよびネガティブな経験の多さ、母親および父親のあたたかな養育の少なさの全要因へと関連を示したものの、学校ライフイベントが自尊感情への関連を示した一方で、母親および父親のあたたかな養育態度から自尊感情への関連は見られず、両親の養育態度の効果を考慮してもなお、学校ライフイベントが媒介要因として効果を示すことが明らかとなった。

第8章では、研究1から研究5までの結果を総括し、注意欠如・多動傾向が高い思春期の子どもは、遺伝要因と環境要因の両側面において情緒の問題のリスクの高さを抱えていることを認識する必要性に言及するとともに、後の情緒の問題を予防、軽減するために、学校におけるポジティブな経験の増加やネガティブな経験の減少を子ども自身が実感できるようなケア・サポートを充実させること、そして自尊感情を育成していくことの重要性について論じた。最後に、本論文の意義として、関連する研究分野への貢献や臨床的示唆について述べるとともに、本研究の限界点と今後の研究課題について示した。